

遙かに亭主を操縦するのコツが判り女らしさが増すのじやない乎とさへ思ふ。

東京の噺家の演出技能は人情ものについては断然優れるが、滑稽ものについては到底上方の敵ではない。又噺について比較してもそのネタは到底同日の談ではない。

江戸噺は軽い笑ひ一片の與太話に過ぎないが、上方の舊い噺は世相を深刻に諷刺して寧ろ痛快である。

先代の金原亭馬生は東京の新人として大いに名聲を博したが、馬生の噺はそのネタが全部上方噺の焼き直しであつた。

噺の種の多い人には故人では高臺寺甘酒屋の文之助、それに嫌味な人であつたが文團治などは相當に深い印象がある。現在では松鶴師匠がその尤たるものと思ふ。

餘談であるが本年二月十八日、四天王寺本坊で「四天王寺について」の座談會があつた。出席者は大阪に於ける學界趣味家新聞人を網羅した名士揃、先ず江崎政忠、

福良虎雄、齋藤憲太郎、入江來布、澤村幸夫、金澤種次

郎、岸本準二、武居巧、魚澄惣五郎、田崎仁義の諸先生に、不名士としては僕が唯一人、寺側から木下貫主、坂本執事、出口、下和佐、奥田の三部長の顔振であつた。

四天王寺をもつと全國へ普遍的に認識せしむるの方法はどうかとの話題に、僕は松鶴の落語「四天王寺詣」を宣傳に利用するが効果的であるを提案したが、列席の名士も寺側でも落語「四天王寺詣」を御承知の方がなかつた。何にかの機會に松鶴師匠を煩はし、本坊で四天王寺詣を口演して貰いたいと思つてゐる。

漫才に押されて僅かに餘命を保つが如き昨今のお治世に、噺家諸君の月旦は差控へる方が賢明とするが、噺は自然の面白味を味ふもので、先代春團治の如く聽衆に笑いを強請するは落語の本道ではなかつたと思ふ。



入込噺

運うん

附つく

酒ざけ

笑福亭松鶴  
カツト 桂 米 之 助

宵のうちは旅のお噂にきまつて居ります。

「オイ喜いやん早う歩きんか、甚い顔の色が悪いな、腹でも痛いのかやないか、如何したんや」

「清やん、夕べ宿屋で飲んだ酒が悪いので頭が痛いのかや、何處ぞで好い酒を飲み直したいな」

「オイ見てみ、向ふの屋根裏に立派な杉の看板が吊つたある、彼の家は酒造屋しゆざうやと見へる、向ふへ行つて良い酒を一寸一合程引掛けて行かうやないか」

「そうしやう」

やつて來ますと大きな酒造屋しゆざうやで、表には繩簾なまのれんが吊つてござります、それを潜つて内へ這入り、

「御免やす」

「へいおいで」

「一寸お氣の毒やが、酒を一合飲まして下さらんか」

「へい甚い折角さかづかでおますが、私の方は酒賣元でござりますで、居酒は誰方様でも、お斷りを申して居ります」